

ビギナーの釣りはハプニングの連続



小 松 正 明

いろいろな言い方があるのだけれど、人生の楽しみ 方としてこんな言葉がある。

- 一日幸福でいたかったら、床屋に行きなさい
- 一週間幸福でいたかったら、結婚しなさい
- 一ヶ月幸福でいたかったら、良い馬を買いなさい
- 一年幸福でいたかったら, 新しい家を建てなさい
- 一生幸福でいたかったら、釣りをしなさい

この言葉を知っていたわけではないが, 50 代になってから釣りを始めた。

北海道の道東は釧路市へ転勤になった際に、「この 地でフライフィッシングをしないのは、讃岐へ行って うどんを食べず、信州で蕎麦を食べないようなもので すよ」とうまいことを言われたことがきっかけだった。 フライフィッシングというのは、虫に似せた疑似餌で 魚を誘い、釣った魚はキャッチ&リリースをして決し て食べたりしない優しい釣りだ。イギリスの貴族発祥 の釣りで環境に優しく、紳士的なところも素敵だった。

ところが、次第にフライフィッシングの釣り仲間が増えて、またその人たちに海釣りにも誘われるようになって、どんどん釣りの世界が広がっていった。今では夏の盛りこそフライフィッシングだが、それ以外の季節では海へ出かけて食べられる釣りにもいそしんでいる。

そして、そんな食べられる釣りの真骨頂が冬の氷上 ワカサギ釣りだ。これは冬に凍った湖に専用のドリル



写真―1 いざ湖へ~橋の下にテントが見える

で直径 20 センチほどの穴をあけて、湖底近くにいる ワカサギを釣り上げるという、冬の北海道の代表的な レジャーだ。冬の北海道で、しかも氷上に何時間もい るので、多くの場合、底に布がなくてただ空間を覆う だけのワカサギ釣り専用のテントを張って、その中で 穴釣りをする。

アウトドアにはハプニングがつきものだが、今回は そんなビギナーである私の、ワカサギ釣りでの二つの ハプニングをご紹介したい。

【テント吹き飛ばされ事件】

一つ目は「テント吹き飛ばされ事件」だ。

普段から妻と出かけるワカサギ釣りだが、その日も妻と二人で札幌市郊外の湖にテントを張って朝から釣りをしていた。「今日から北日本は天候が荒れる」という天気予報だったが、山に囲まれた湖なら大丈夫だろうと、高をくくっていたのだ。

この日は気温が上がって、湖面の表層部はかなり緩んでいて、しばしば長靴がずぼっとぬかるような状態だった。それでも食べられる釣りは欲が勝るもので、多少の苦労はいとわずにテントなどの釣り道具一式をソリで運んでテントを設営した。テント設営の場所も、雪面がぐずぐずと柔らかいので、付属の短いペグでは効かない気がしたのと、朝は風もそれほど強くなかったので、テントの6本の支柱だけを固定して、張り綱で補強はせずに釣りを始めた。

朝8時くらいから釣り始めたが、ポイントの選び方が悪いのか、なかなか釣れないいわゆる「渋い」感じが続く。「釣れないねー」と我慢の釣りを続けていたのだが、そのうち昼前から時折ブンッと、非常に強い突風が吹くようになった。

その風もだんだん強くなってきて、(そろそろ張り綱で補強しておいた方が良さそうだ)と思っていたその矢先、それまでにないものすごい突風が背中から襲ってきた。

「うわっ!」と、瞬間、テントの支柱をつかんで押さえようとしたのだが、突風に煽られてテントはブワーっと浮き上がって手を離れ、雨傘のように一気に飛ばされてしまった。

[こりゃいかん!]

ぬかるんだ雪面の上を慌てて飛ばされたテントを追いかける。テントは広大な湖面で100メートルほども 先の、長大なのり面の手前に転がっていたが次の大風が来たらたまらない。必死に走ってようやくテントをつかみ、引き戻してきたが、釣っていた場所は大混乱。 電動リールなどの釣り道具はもちろん、いすやテーブルもあちこちに転げて散乱しておおわらわだ。

「今日はもう止めよう」とさすがに心が折れて撤収 を決めたが、時折吹く強風にテントが暴れて撤収作業 もなかなか進まないほどだった。

回りを見ると、そこいらじゅうで次々にテントが飛ばされて、何人もが同じように右往左往している。



写真-2 この日は何張も飛ばされていた

そんな中に、男女のグループが自分たちの釣り用テントとは別に設営したトイレ用と思しき一人用の背の高いテントがあった。朝見たときは(あれは便利だな)と思っていたが、強風ではひとたまりもなく、我々のテントと同様に沢の奥まで飛ばされていった。

後から、「中に誰かが入っていた時にテントが飛ば されなくて良かったね」と笑ったが、本当だったら笑 い事ではなかっただろう。

その次から、テントは必ず張り綱で補強することに したのは言うまでもない。

【あわや死にそうになる事件】

二つ目は「あわや死にそうになる事件」だ。

その日のワカサギ釣りは妻が一緒に行けなくて,友人の Y さんと二人で行くことにした。ワカサギは,一般には早朝が釣れると言われるが,この日は早朝というよりも昼前から少しずつコンスタントに釣れるようになった。

お互いにそこそこいい感じで釣り上げて,「15 時に上がりますか」と言ったのだが, 15 時少し前に私の釣りあげたワカサギを数えたところその数は93 匹だった。「ここまできたら一束(いっそく=100 匹)

まで行きたいので、ちょっと延長してください」と延長を申し出たところ、友人の Y さんも「いいですよ」という返事。「一束を釣る」というのは、釣れた日の一つの勲章のようなものなので、つい欲が出たのだ。

さて、残り7匹を釣り上げるぞ、と力が入る。



写真-3 深い湖では電動リールが大活躍

後から考えると、これが災いしたのだが、時間を延 長したことで、テントの中で暖を取るために燃やして いたガソリンバーナーの換気が疎かになっていた。

97…, 98…, 99…と連れて,「やった! 100 匹達成! ありがとう!」と, 100 匹目が釣れたところで,「じゃ あ撤収しましょう」と, テントのジッパーを開いて外に出た。ところが次の瞬間に, 急に猛烈な頭痛と吐き 気が襲ってきて立っていられなくなった。

(え? どうしたんだ?) と Y さんを見ると、同じように外に出た Y さんも具合が悪そうにしている。

頭に浮かんだのは(まずい!一酸化炭素中毒か!)という事。どうやら不完全燃焼と換気不足で一酸化炭素中毒になりかけていたようだ。実際にその状態になって驚いたのは、単なる酸素不足と違って、何度深呼吸をしてもその気分の悪さが治らない事だった。テントの外で雪の上に寝転んで二人でハアハアと深呼吸を繰り返すがそのうちにひどい悪寒も襲ってきて、いよいよ(これは救急車を呼ばないとだめかな)と思うほどだった。

15 分もそうやって深呼吸をしていただろうか、少し体が動くようになったので、ひどい吐き気に襲われながらも、二人してテントなどの釣り道具を撤収して車へ戻った。車へ戻ったは良いが、私はとても運転ができず、幸いにして私よりも軽症だった Y さんが運転してくれて自宅まで戻ることができた。

テントを出てから2時間後に家に着いたころには、ようやく人心地がついた感じがしてほっとした。しかし、今思い返してもぞっとするのは、『具合が悪くなったから』テントを出たのではなく、具合の悪さに全く気が付かないままに『100匹目が釣れたから』外に出

たということだ。あの100 匹目が釣れていなければ二人ともテントの中で動けなくなっていたに違いない。一酸化炭素中毒で亡くなるのは、気が付かないうちに体が動かなくなるからだ、ということがよく分かった。今でもあの100 匹目は神様からの贈り物だったと思う。

後から二人で反省をしたが、振り返ってみて間が悪かったのは、私のテントに、Y さんのガソリンバーナーという組み合わせだったことだ。七輪や練炭は一酸化炭素中毒の危険があるとは思っていたが、空気を圧縮して燃焼させるタイプのガソリンバーナーも空気圧が下がると不完全燃焼の危険がある。私はバーナーの炎が小さくなったような気がしたし、Y さんは空気が悪いように感じていたのだが、お互いが相手の持ち物だったので、つい遠慮してしまって何も言いださな

かったコミュニケーション不足が最大のミスだったというわけだ。

あのまま、一酸化炭素中毒で死んでいたら、文字通り「あいつは釣りをして一生を幸せに死んだんだな」と笑われたことだろう。「一生楽しみたければ釣りをしなさい」という諺をブラックジョークにしなくて良かった。

この事件の後で、二人そろってネットショップで一 酸化炭素警報器を買い求めたことは言うまでもない。

人生には感動と笑い話が必要だが、アウトドアには 危険がつきものだ。こんなビギナーの失敗を他山の石 として、どうぞご安全に。

-----こまつ まさあき (一社) 北海道舗装事業協会 専務理事----

